

日本・モンゴル・ロシア合同ノモンハン事件

六十周年記念シンポジウム参加報告

下河邊 宏 満

平成十一年八月四日(水)及び五日(木)にモンゴルの首都ウランバートルの平和友好会館に於いて、日本・モンゴル・ロシア合同のノモンハン事件六十周年記念シンポジウムが開催された。

シンポジウムは、モンゴルの防衛研究所(所長ガヴァ少将)の主催で行なわれ、同研究所の研究者、ロシア国防省軍事史研究所のガヴリロフ大佐、モンゴル国防省事務次官、民間の歴史学者および東京外国語大学の留学生等多彩なメンバーが出席した。防衛研究所からは、筆者と第二研究部の間山克彦所員の二名が参加した。

シンポジウムでは研究者十四名の発表と活発な討論が成され、日本とロシアの発表者には、モンゴルのテレビ放送局と軍の新聞記者およびロシアのラジオ放送局のインタビュールが行われた。モンゴルではノモンハン事件をハルハ河戦争と呼称している。その理由は、ノモンハン事件に於いて日本側がハルハ河を、モンゴル側がその東方、最大で約二十キロ・メートル付近の線をそれぞれ国境と主張したからと思われる。

今回の研究発表内容の特徴は、「ハルハ河戦争当時の世論」、「この十年

間のハルハ河戦争の研究」、「ハルハ河戦争当時のモンゴルに於ける政治と肅清」、「二十世紀のモンゴルの歴史に於けるハルハ河戦争の位置づけ」および「ハルハ河戦争に起因する領土問題」等の題名に見られるとおり、モンゴル側が幅広い視点から研究成果を発表したことである。また、日本とロシアの発表は、いずれも新史料に基づくものであった。

ロシア側の発表には「田中上奏文」の一部引用があり、討論の際にモンゴル側から同上奏文に対する現在の日本の認識について質問が出された。勿論、「偽文なので関心がない」と回答した。ついでに、筆者がロシアのガヴリロフ大佐に同様な質問をしたところ、「偽文であっても日本軍の実際の行動は上奏文に近いものであった」という返事が返って来た。モンゴルとロシア側には「田中上奏文」に対する関心が未だ残っているようである。

しかしながら、ハルハ河戦争に参戦したモンゴルの老将が「我々は当時武器を取って戦ったが、これからは花束を交換し合う仲に成りましょう」といつて握手を求めて来た場面もあり、モンゴル・ロシア両国とも

従来の教条的な日本侵略史観から、将来のために真実を追求する歴史研究へと変化しつつあることがシンポジウム全般の印象であった。また、ガヴリロフ大佐からロシア国防省軍事研究所編纂・一九九七年出版の第二次世界大戦関連史料集が、ガヴァ少将からは全二冊からなる一九九六年出版の古代から現代までのモンゴルの歴史の本が、それぞれ日本側へ寄贈された。

お礼に日本側からは、大本営陸軍部研究班が作成した「関東軍二関スル機密作戦日誌抜粋 ノモンハン事件」の複製と、ノモンハン事件の特集号である軍事史学会編集の『軍事史学』通巻一二八号をガヴァ少将に贈呈した。

ホスト役のガヴァ少将は、「モンゴルは独立を守るためハルハ河戦争を戦いました。現在の日本は戦争を嫌い、平和と安全のための政策を進められていることを十分承知しております。また、日本の経済援助に深く感謝申し上げます。一方、モンゴルとロシアの間の歴史には良い時代とそうでない時代がありました。今では、モンゴルとロシアの軍同志の友好的な歴史研究交流が毎年行われております。モンゴルは今後とも民主化の路線を歩み続けるでしょう。さらにモンゴル・日本・ロシアの三国で戦争の研究を通じ交流を深めましょう。歴史研究を通じ人間を知りましょう。」と語り、参加した研究者に深い感動を与えた。

ウランバートル滞在中、昨年度防衛庁防衛研究所の研修生であったモンゴルのダヴァードルジ中佐の通訳と案内付きで、モンゴルの民族音楽の鑑賞と歴史博物館及び軍事博物館見学の機会が設けられ、モンゴルの

歴史と文化を十分堪能することが出来た。

モンゴルの人口は日本の約五十分の一にすぎないが、国土の面積では日本の約四倍と広大である。筆者は、モンゴルの大地に立った時、改めて人間の生活空間の意味を考えさせられた。また、空港周辺の草原の緑と、郊外に住む人々の厳しいながらも自然と調和し悠々とした暮らしぶり、科学技術の利便性と弊害のジレンマに悩まされる都市生活の問題に何かを示唆しているようであった。

シンポジウムの発表題名と発表者は次のとおり。

八月四日

一、ハルハ河戦争と現代史

モンゴル防衛研究所所長、工学博士、助教授

R・Gavaa少将

二、ハルハ河事件についての新たなロシア公文資料(張鼓峯事件の新史料とノモンハン事件のゾルゲ情報等)

ロシア軍事史研究所、心理学博士

V・A・Gavrilov大佐

三、モンゴル軍第一集団の指揮に関する諸問題

モンゴル防衛研究所主任研究員、史学博士

D・Gombosuren

四、ノモンハン事件の国境線の真相と事件拡大の要因

防衛庁防衛研究所戦史部 主任研究官

下河邊宏満

五、モンゴル・日本の軍事交流の経緯

モンゴル防衛研究所研究員、修士

G・Myagmarsambu少佐

六、ハルハ河戦争とモンゴルの国境警備隊

モンゴル国境警備隊史研究部長、修士

Ch・Altangerel大佐

七、ハルハ廟の帰属問題

モンゴル防衛研究所(戦史)部長、史学士

B・Davaasuren大佐

八、ハルハ河戦争当時の世論

モンゴル科学歴史研究所上級研究員、

史学博士 J・Bold

九、ハルハ河戦争の捕虜について

モンゴル国家公安庁資料局長、史学博士

D・Todd中佐

八月五日

十、この十年間のハルハ河戦争の研究

モンゴル防衛研究所研究員、史学博士

H・Shagdar

十一、ハルハ河戦争の参加者の回想

ハルハ河戦争参戦者

Shagdaruren

十二、ハルハ河戦争当時のモンゴルに於ける政治と肅清

モンゴル防衛研究所研究員

S・Ganbold中佐

十三、二十世紀のモンゴルの歴史に於けるハルハ河戦争の位置づけ

モンゴル科学アカデミー歴史研究所上級研

究員、史学博士

H・Khisht

十四、ハルハ河戦争に起因する領土問題

モンゴル国境警備隊史研究部

Ts・Lkhagvasuren中佐